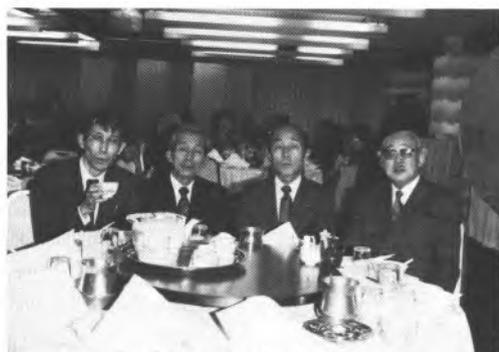


川柳句集

川柳句集
上巻

川柳句集

いそぢり火



菜先生(右)著者、独歩氏、薰風先生



川柳塔社…おめでとう会
S59年11月15日



森田茗人邸にて東野大八先生と S61年3月



茗人忌大会にて黒川紫香先生と



第八回 全日本川柳大会(米子市皆生) S59年6月



長女一家（倉敷）



長男一家（鳥取）



倉敷にて



書齋にて



東浜海岸にて

青春の炎

妻 好子 (22才頃)



著者 (23才頃)



浦富海岸にて (25才頃)



田辺海兵団 菅田氏 著者 (右)



俳句の仲間
昭和22年頃 (春翠邸)

前列左 安塚北窓氏、石田明美氏
後列左 著者 (小林砂風)、小谷春翠氏、池内たかし氏



著者（三朝温泉にて）

序 文

鳥取県川柳作家協会 会長 小林由多香さんが句集「いさり火」を発刊するとい
うので序文を書くことになった。

昭和二十八年に、故森田茗人氏の手ほどきで川柳界に入ったが、彼の才能はめ
きめきと湧出して、現在鳥取県下の柳界をリードし、会長の名を肩書にしても恥
ずかしくないポストに立っている。

停年まで勤めた公務員という真面目さが、この句集の中に、いさり火のように
チラチラと輝き、まるでフランス料理のフルコースを食べているような、優雅な
艶麗さを感じるものがある。

とりたてて難解な句を作ったり、銜い気のある言葉をもって句を飾ったりして
いない、真摯な穿ちに徹した生活句の多いのは、なんと言うても、高潔な人格の
然らしめるところで、読んでいくうちに首肯する句の多いのは、川柳の本道をコ

ツコツと歩んでこられた賜物であろう。

由多香さんらしい、優しい「いさり火」という名の句集を繙いて見ると、

一步先行かせて射程距離におく

盛大な拍手 嫉妬の音がする

過去捨てるひとりの旅は雨がいい

若返る人事おちおちしておれず

出稼ぎの俺にはまるい月があり

口実を作る悲しい酒に酔い

保護色に己れの好みなどはない

ユーターンして兄嫁にけむがられ

責任のないのが勇気づけてくれ

帰省子と朝寝の床に深いいる

猿芝居 猿の機嫌で幕をあけ

先頭を走れば孤独つきまとい

角隠し 父へ母へも似た笑顔

愛情の絆 七くせみんな好き

延着の列車最後に母が降り

繰り返さなければよかつた嘘がばれ

卵酒やっぱり医者に行くど決め

ゆっくり読めば、珠玉の句がもつとたくさん出てくるのであろうが、書けばみな書かねばならない。

彼の身辺から香うが如く生まれ出る生活吟のうまさは抜群である。

この句集を川柳の本道の手引として、机辺に置かれることをお勧めし序文とする。

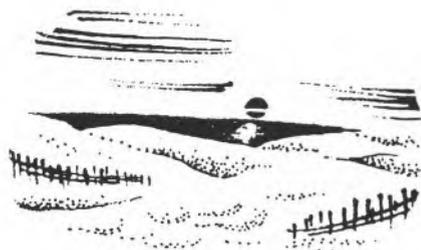
天皇誕生日の日

水鶏庵にて

西尾 栞 識

いそり火を抱いて砂丘の夜が深む

由多香



一步先行かせて射程距離におく

盛大な拍手 嫉妬の音がある

共稼ぎ夫婦のレール錆びさせぬ

目覚しで母のいくさが火ぶた切る

愛冷えた夫婦が札を数え合う

鍵っ子へ道草叱る母が居ず

国の補助待つ雨漏りにバケツ置く

過去捨てるひとりの旅は雨がいい

ワイングラスを磨きいくさの準備する

車椅子 心のかげりなど持たず

リラックスしろ 監督の目が笑う

子を連れた獲物 照準定まらず

義理人情ない世の中が進歩する

目ざわりになる脇役も同じ汗

傷心へ演歌 雨あめもつと降れ

和紙を漉く誇りへ過疎を捨てきれず

若返る人事おちおちしておれず

意地だけで勝てない技の背負い投げ

前任者慕って部下がなつかない

英雄と言われる謀反だってある

平等に分けて長男気に入らず

先頭を走れば孤独つきまとい

店売りでもうけ自販機でも稼ぎ

蟻今日も生きてく列を崩さない

ハネムーンながい約束から解かれ

野心など持たない腰はやわらかい

サービスの一つ笑顔も添えておく

嘘つけぬ母へ約束多すぎる

手応えのないまま北方呼びつづけ

耐えて来た怒りへ咳がとまらない

個性まで曲げて派閥の隅に居る

弁当を開けば今朝のヒス匂う

勲章の輝き失せて平和です

出稼ぎの俺にはまるい月があり

欠席の嘘考えながら歯を磨く

愛錆びて女鏡を遠ざける

子らの目へ母平等に切りわけ

高飛車に出られ被害者小さくいる

伸びきってゴムもうゴムに戻らない

地味な柄 父に素直な母である

口実をつくる悲しい酒に酔い

残業から帰れば巨人負けていた

同情へひととき痛み救われる

すり切れた歯ブラシ亡父のままである

執念は美辞麗句など受け付けず

燈明の電化が姑の気に入らず

札束を数える指の無表情

ジーンパンを嫌い若さにけむがられ

新しい名簿わが名を確かめる

保護色に己れの好みなどはない

悪友の一人に俺の名があたり

シェーカーのリズムに今日は酔わされる

けちん坊でよし堅実な道歩む

慣れ合いを避ける冷飯食わされる

うらぶれた父花道に遠くいる

ユーターンして兄嫁にけむがられ

外孫の誕生にわく新春の膳

おだやかに年を重ねて添いそわれ

思い出を都会の隅にそつと捨て

お別れのもしびそつとそつと消し

景気はどうあろうと初日おごそかに

初日の出 不倖せなどないあかり

鶏しかと卵を抱いて寄せつけず

新しい芽生え期待の水もらう

心もう故郷みやげの数をよむ

父さんの茶漬け茶漬けが欲しくなり

音消して反省多き日記書く

あこがれた都会へ夢を捨ててくる

納得がいった眼鏡のくもり拭く

むほん企てる眼鏡の奥ふかい

ひと呼吸流れを変える幕おろす

風当りきびしい椅子に春信ず

珍しく来たと思えば金無心

合格へ母内職の手がはずむ

ポスト今日機嫌の悪い手紙抱く

ライバルも疲れたらしい灯り消す

すねている横顔 慕情かきたてる

夕立のいよいよはげし恋はずむ

反省の横顔ビンタ待っている

ひらめきの鈍い頭で頑固です

ハツタリも時には武器として温め

責任のないのが勇気づけてくれ

道草のすぎた人生たそがれる

勲章を胸に余生をいたわられ

胸に手を当てれば菩薩よみがえる

おみくじの吉へ自信をとりもどし

二次会をはずれて左遷ひとり飲む

やけ酒の飲める倅せだつてある

酔いぎめの水反省も混ぜて飲む

倅せをささずかる大安母と繰る

伝統のしし舞い継いで過疎守る

卒業へかばんのいたみなつかしむ

新製品かばんに詰めてノルマ追う

うっぶんを晴らす坂道けわしすぎ

中古車へ屋根までついた車庫を借り

再起の芽シーズンオフにあたたためる

シーズンを先取るチラシ嘘も盛る

色変えて山シーズンの貌つくる

道くねりくねって峠の灯に遠し

好きな道選ぶ片道切符買う

同じ手で育てて好みみな違い

これしきの坂をと思う息がきれ

人口の脹れへ山がけずられる

落選のポスター笑顔持ったまま

一浪の母あたたかく父きびし

師の鞭のあるときびし温かし

宝石の輝き今日は魔性持つ

ライバルの浮いてる腰を見逃がさず

からいばりしている腰は落つかず

子らの目へ不思議な父と母の仲

横道へそれたくもなる運勢で

妥協案燃える気性が許さない

茶柱を信じやるだけやってみる

祝日の国旗へ平和ふと思う

履きなれて山坂知った靴と老い

慣れた手で師匠一筆入れて生き

押し売りへ娘の器量ほめられる

偽りの心みどりに洗われる

宝石の輝き女狂わせる

どん底に育って太い線を持つ

鼻欠けた理由人形語らない

宿下駄の鼻緒に旅をかみつかれ

父の死へ私の平和閉じられる

常習の遅刻と遅刻門で合い

ライバルも呼んで盛会ぶりを見せ

会長へ一任酒座に切り替える

そよ風に内緒内緒をくすぐられ

捨て石が無気味な貌で待ちうける

熱さめた愛へあくびが止まらない

冷凍のカニが真夏の膳かざる

冷凍庫四季の香りを抱いて凍て

死線からもどりうつろな目で笑い

蟻なにを迷うて俺の臍上る

先客も催促らしい語気荒げ

カラオケもそろえ民宿負けていず

平凡な石で蹴られた方へ向く

捨て石の意地逆転を秘めている

一枚の片道切符大志抱く

再建のひびき遺蹟も掘りおこし

電話でも叱りはるばる来て叱り

悪人になりたくはない耳ふさぐ

相槌をうつポイントも心得る

いたずらな風よ女をあわてさせ

夜ふかきを叱る歯ブラシ滑らない

出直しの朝歯ブラシの色も替え

失恋へ食欲までも奪われる

還暦の赤へ心も若返る

ひまわりの首重そうに陽に向う

亀首を伸ばして何か言いたそう

いらだちの箸へ小豆が挟まらず

飾り気のないプログラム妻と組む

値切るだけ値切り月賦の判を押す

香水を一ふり女できあがり

母に聞くとこだけ残し遊びに出

半額の品だけ買って素通りす

豪遊の背広汚職のにおいする

太陽へ素顔を向けて悔いがない

筋道を通した酒が胃にしみる

ライバルと同じ坂道鞭を打つ

逃げ道を持たぬ捨身でふり向かず

漁り火の見える民宿ビール酌む

由多香



釘一本さして手ごたえたしかめる

和解する男同志のまるい酒座

背負い投げくうた日記白いまま

気前よく振るまい赤字のぞかせず

招かざる客に赤字を置いてかれ

酒ぐせがエリートコースはずれさせ

酒好きな仏へ通夜の酒はずむ

反対を守る鉢巻かたくしめ

よろめきを知らぬ人生たそがれる

お別れに無情なベルが鳴りおわり

赤い羽根募金へ秋が深くなる

名も告げず去った善意は賞に洩れ

決心がついたたばこを消して立つ

衣食住足って梅干し忘れられ

民謡と軍歌で老いの酒はずむ

貸すほどもないへソクリを数えて見

金策に疲れた顔へ貸してやり

母の手へ豆腐素直に賽となる

うさ晴らす酒はコツプに山と盛り

酒に嘘まぜて悲しい酔いを知る

再会を迎えるお湯が満ちあふれ

断酒など縁ない記事よコップ酒

酒たばこやめて人間細くする

わびしさを残し祭の灯が消され

地味好む妻に宝石輝かず

温情にふれた涙をふいて起つ

不都合な話はぼけた顔で聞く

ダルマにも笑ってほしいめでたい日

ばれること覚悟の嘘で埋めておく

いつか向く運を信じて靴磨く

翔べる夢描きにわとり卵抱く

経験がファイトに負けた汗苦い

アドバイスきれいにわなを抜けさせる

聞くだけは聞いて助言にこだわらず

余るほど買って足りぬ食いざかり

終戦を知らない兵よ国栄え

交替の人材持たぬ負けいくさ

首位を追う差を三位にも狙われる

カラオケもたしかめ宿の予約する

誕生日 双子それぞれ欲を見せ

南から北から寄つて賀状着き

松の内 妻に口紅見つけたり

賑やかに飲んだ赤字に居すわられ

マニキュアの指がきれいにミカンむく

帰省子と朝寝の床に深くいる

靴下を洗ってあげる恋ほのか

靴下のおい無精髭と来る

靴下の替えも無くなり旅終える

小石には小石の重みだけの渦

うまそうな話片耳だけで聞く

いいことがあるのか無口よくしゃべり

トイレにも行って面接落着かず

人のいい男歯止めの杭となる

タクシーを傘のかわりにするゆとり

弁当と傘 母さんに見送られ

プロパンの火力へ豆が煮えすぎ

父が足し母が補助して車選

料金は同じ補助席かたすぎる

一流校狙う夜食に愛を盛り

税金を納めて軽いペタル踏む

病床の父の一喝風変える

旅行カバン妻の匂いを詰めて出る

春一番 隣のゴミ箱置いて逃げ

後任へわびしく赤字置いて行く

後任の決まらぬ椅子の冷えたまま

トラブルをおさめる酒を買っておく

冬眠をさます菜の花咲いてくる

初恋の思い出カンナもえていた

梨の花咲いて持病が目をさまし

ゴキブリも生きたい裏の裏を選び

腹割って話せば敗者にされそうぞ

早耳のとちり誤報を抱いたまま

見栄の目が素直にメニユー決めさせず

父逝ってから母の数珠つやを増し

苦境から抜ける見事なうそを組む

鯉のぼり空の青さを吸いつくす

さくら餅 癒える日近い舌にのせ

猿芝居 猿の機嫌で幕をあけ

傘の鈴 シャンシャン街を活気づけ

一枚の辞令 辺地へ荷をまとめ

翩翻と日の丸暗い過去見せず

流行と好みの柄がかみ合わず

ライバルのあらをさがしている落ち目

大ジョッキ握る夜空が美しい

父さんの悩み家中暗くする

人生のパズルゆっくり妻と解く

新しいボトル再起の糧とする

汗の無い生活足場が定まらず

困らんの灯へゴキブリも顔を出し

やけで飲む酒へ音楽やわらかい

血色の良さも写真に届けられ

主治医よりうるさい看護癒え近し

かくれんぼ葉っぱゆれてるあそこかな

反省で埋め月末の日記閉ず

嫁ぐ朝 犬に好物盛っている

母がわり妹先に嫁がせる

今日からは他人になると高島田

たくましい海の男よ漁り火よ

山陰の海思いきり青く描く

むき出しの個性白墨また折れる

角隠し 父へ母へも似た笑顔

悔い綴る日記座布団冷えてくる

打明けた心へ座布団あたたかい

ボーナスを小出し半年つなぎ止め

落ちこぼれ救うスピードやわらげる

非常口確かめやおら旅装解く

訃報まだ信じられない駅にたつ

しじみ貝真珠抱く夢など持たず

責任感だけは燃えてる能無しで

失恋をいたわる母も過去を持ち

原爆の恐さ説く汗玉となる

洋上で正月お神酒積んで発つ

夏商戦見切り 残暑に冬を練る

近道をすればライバル同じ道

台風一過 日本にこんな秋もある

地獄耳 俺のうわさを提げてくる

友情に甘えたまままで伸びもせず

ダム澄んで湖底の村がのぞけそう

反省で今日の日記を書き終る

万札が一枚財布にへばりつき

アメリカに財布見られている軍備

ああ平和 菊の御紋が忘れられ

不機嫌な妻へ弁当忘れて出

弁当と笑顔 出勤見送られ

暴走の悔いをベツトに横たえる

直線を走る瞳に過去はない

Uターン 婿の話に甘んじる

記念樹へ天皇腰を丸められ

湖の汚れ伝説遠くなり

漢方のききめ信じるほど苦い

手の届くところだけ女釘を打つ

子の給料入れて新築メドがたち

窓際に置かれ読書の秋となる

倅せに一日終る陽が赤い

今度いつ着よう晴着の手入れする

亡母に見てほしい晴着に包まれる

一粒の種 大輪の貌を持つ

一人娘を嫁る良縁をもてあまし

主婦の目は豆腐の欠けも見逃がさず

心まですきんだ酒に底がない

砂丘の名もらいラツキヨよく売れる

落選のうき目膝元からくずれ

ゆたかなる髭 孫達に囲まれる

極楽の切符をもらう善意積む

瀬にもなり渚ともなつて川生きる

鉋研ぐ職人ストなど考えず

真つ暗な夜道を犬に吠えつかれ

悲鳴などあげておられぬ子沢山

栄転のうわさ歳暮を妻と撰る

柔和なる医師の眼差し死線越す

資金ぐりできて師走の風に乗る

不器用な血筋の筆が走らない

隠し芸派手にし左遷とは見せず

負け犬がゴロゴロ求人票に群れ

大鳥居 善人らしい顔で抜け

玉砂利がゴロゴロ初春をすねている

神様にすぎる万札派手に舞う

島に橋かかる日職を奪われる

玉砕の島 観光の顔で売り

直線が素直に引けぬ日のあせり

漁り火の点々孤独つららぞる

由多香 



熱帯夜 子が跳ね父が派手に跳ね

まり素直 投げた力ではねかえり

大寒の任地ひとりの米をとぐ

あかぎれの指へダイヤが安っぽい

安売りの山から好みの柄を撰る

燃える恋たらいで島へ渡り切る

ハーモニカいくさの歌にふれてみる

湯気ゆるりゆるり縁談詰められる

たわいない噂から逃げ耳すます

頂上が見えて靴ひも締めなおす

秀才の血筋もらって髪うすい

裏切りの心 火種が風を待ち

たばこの火つけるチップも含まれる

後晴れを信じた雨に泣かされる

心もうふる里 切符の列にいる

里帰りして方言を子と笑う

一生を酒と女に狂わされ

試歩一歩一歩大地を踏みしめる

ジnkスが心の隅で袖を引く

子には子の夢シャボン玉ふくらます

先頭が転んだ優勝祝われる

父ひとり反対 家の風かわき

分相応 社宅に似合うひなを買う

ふ卵器で生まれて母の愛知らず

お役目を果して輪ゴムまるく寝る

エプロンのポケットに輪ゴムすねている

愛情の絆 七くせみんな好き

履歴書を飾る短大卒業す

プライドがやはり背信許さない

プレゼント派手に誘いのわながある

お隣の居眠り僕も眠くなる

逆探知 知らぬ電話にすごまれる

訃の電話それから苦い酒となり

夜明けまで富山の薬飲んで耐え

宿題を覗く母にも自信ない

壁一重 飯場のいびきたくましい

正面を登れば急な坂ばかり

負けいくさ正面ばかり打球飛ぶ

性格の違い夫婦として合わす

電話では言えず聞こえず恋はずむ

再婚の夫婦で同じ趣味に凝る

長い雨 太鼓の音を狂わせる

北風に耐えて還らぬ島を待つ

風下へ回りうわさに耳澄ます

また女ますます姑の癩にふれ

俺よりも若い課長に気に入られ

小回りのきかぬ男の堅い椅子

ひからびた風へ癌だと父気づく

子の夢を拡げる小石見当らず

仲間からはずれ石ころける小道

金で買えない友情をぬくめ合う

三月のノルマ制服売りつくす

情報を囲み奇跡を信じ合う

たいこ結び隣を呼んでやっど結え

満月へみにくいくさのぞかれる

大学を出たばかりに嫁き遅れ

俺の顔井戸の底からのぞかれる

家計簿へ母だけわかる赤い丸

保育器の指十本を確かめる

すねた子が二階へこもり夜となる

二の舞いはするなど父の遺影笑む

ネクタイの派手を鏡に笑われる

嘘を組む 心鏡にのぞかれる

女湯の話題も選挙 かましい

湯加減を熱め田舎の父を待つ

風呂のない借家家賃でがまんする

風鈴の音へ夏ばていたわられ

姑の目へ嫁のすることみなルーズ

少数の意見も胸に溜めて練る

犯人がすました顔で式にいる

足の裏くすぐる砂よ風紋よ

夏休み終つて虫の夏となる

病状を軽う伝えて慰める

虫籠に馴れた順から鳴きはじめ

下向けばこぼれる涙 天仰ぐ

インタビューー古い傷にも触れられる

飲みすぎた朝の枕を陽が笑う

米の味 賽銭箱も知っており

ありがとう言われ父の日てれくさい

結納の着くさわやかな朝を掃く

ラッキーが重なり己れ見失ない

母の顔浮かべ土壇場知恵もらう

胃薬の苦さネオンの灯を悔いる

特売の肉が入歯にそぐわない

足で戸を開けて敷居にけつまずき

忠告を聞く苦い酒胃に溜まる

お役所のドアいらっしやいませがない

残り酒集めて愚痴を吐き溜める

父逝ってからの仏間は母の城

鉛色の空 カニすきの味を増す

百グラム増やして安いマトン買う

売れ残りたたき売ってもまだ残り

裏方に居て賑やかな拍手聞く

三が日終って夫婦だけの餅

再会を迎える朝の靴磨く

平和への夢 難民の船揺れる

雪しんしん春まだ遠し餅を焼く

冬の海 砂丘も見えて蟹うまい

運命線見つめ癌とはまだ知らず

うるう年二月のリズム組み替える

宝石へ女の悲劇仕組まれる

落書きを叱ってノート買ってやる

相談に来るといふ子へ落着けず

母の視野 子等には足りぬ広場なり

値を聞いてさわっただけの松葉蟹

志まげない意地が平でいる

厳格な母です着物よく似合い

語気荒い今日の社長へ気を配る

如才ない社長賃上げには渋い

モデルにもライバルがあり爪みがく

志 恋をしてから揺れはじめ

サラ金も楽でなさそうビラ配り

待ちぼうけ必ず来ると言った指

帰省するローカル線の緑吸う

若嫁の味こつてりとなじめない

父の日の薔薇が真赤に父迎え

うたた寝の短い夢がもの足りず

夕陽背にノルマへ足りぬ靴重し

調律師の耳音階を組み立てる

腕白のおしっこ蟻の列崩す

盛り上がる舞台を袖にいて囃す

喪にこもり祭ばやしを遠く聞く

開店の売り出し義理の客で混み

栄転の酒なみなみと受けて干す

目の前の餌に真面目な芸をする

濡れ衣を干すあたたかい風を待つ

見送りのない出稼ぎへドラが鳴り

よく釣れる隣も同じ餌らしい

補聴器へ田を売る話漏れてくる

機嫌もう直せと男折れて来る

石橋をたたき流れを確かめる

ライバルもおんなじ塾へ来て習う

表彰状 以下同文が味気ない

新郎の手袋の白信じきる

例外と言う抜け道を開けておく

仔を守る耳 足音に身構える

席譲る少年の瞳が澄んでいる

裏切りへ観音様の目が恐い

Uターン酒とたばこを習うて来

税金の戻りでボトルキープする

悪法を砕くはち巻かたく締め

夕焼けに今日の宿題思い出し

胸のうち明かせば流れ星に会う

恋してる年頃 父の目を避ける

金持って行けば地獄も恐くない

口笛を吹き反省の色見せず

会長を替えてマンネリから抜ける

墨つぼも乾き大工に職が無い

本音聞く酒たっぷりと買っておく

風化した愛へ欠点ばかり聞く

苦笑いして失敗を許される

のんびりと草はむ牛を明日は売る

特価品に夢中財布をすられてた

達筆と言われる文字が読みにくい

すべり台やさしい父とならすべる

地獄かも知れぬ化粧に念を入れ

踏ん切りがつかぬ切り札あたたためる

三面鏡 同じ答を三つ持ち

塩つぼも空 夫婦仲冷えたまま

反省の証に髪を短くす

漁り火のつらくらし支えられ

由多香



福豆よ少し入れ歯に固すぎる

悪夢から抜ける冷めたい水を飲む

シルエツトうすく左遷の父帰る

三日分赤字 二月を残業す

根負けをした保険料掛け捨てる

逆らわず誤算のとける春を待つ

千円で定価五円の古書を買う

反戦記書くペン芯がよく折れる

夫婦坂 長所短所を知りつくし

マニキュアの指が指切り派手にする

不景気な話題を変える酒にする

ライバルへおくる拍手は一つ減す

怠けものなどない蟻の列続く

忠告を素直に聞いた傷浅い

ランドセル曲がるところまで目で送り

麻酔から覚めた空虚に妻が居る

童心をわかせてピエロ汗を拭く

気分転換 進路を少し曲げてみる

さわやかに定年となり誕生日

見栄に金かけて貧乏抜け切れず

ひと筋に生きて悪役悔い持たず

事なかれ主義が直線ばかり選る

皺一本 不孝な息子からもらう

先生のペンはすらすらよく書ける

新築の壁へすまない釘を打つ

心地よい泡 退院の髪洗う

悲しみをますます深くする弔辞

大ジヨツキの泡にくちびる砥められる

横すべりして窓際の席温め

スーパーの流れをもらう小商い

管理職に抜擢 器用さが失せる

暑に耐える蜷の汁を熱く吸う

悲しみの深さやつれが戻らない

ライバルの余裕横面まで憎い

夫唱婦随 夫の個性に染められる

特価品それでも女まだ迷い

延着の列車最後に母が降り

鍵束の中の一つがよく光り

無理やりに納得させて背かれる

北風も坂も計算 進路選る

信号の赤ライバルを見失ない

倒産を師走の風にさらされる

根性ももらいのれんを分けて出る

熟年の女ずるさも身につける

苦手意識 相手も持っているらしい

先生が年下 絆あたたかい

新築のプラン円高来てくずし

振り上げた拳へ咳が止まらない

退職金 銀行さんに攻められる

浪人を抜ける鉛筆とがらせる

アリバイのない合鍵を一つ持つ

塾へ行く鉛筆母に削らせる

合格へのびのび春の風を吸う

直線の道にはわなが仕掛けよい

突然のポストへ椅子がなじまない

雑草の強き土など選ばない

句読点打って小さな風を待つ

師の目にはひよこ 出る幕もらえない

左遷地へ人形の鼻欠けて着き

看病のあくびとあくび峠越す

不自由な耳にも不況風確か

のびのびと雑草過疎へ背伸びする

旅ひとり大人のおもちや屋も覗く

一周忌 犯人はまだつかまらず

意表つく顔ぶれ裏の裏をかく

ロボットのおもちゃ孤独な子に育ち

選挙戦のどかな村を二分する

窓際の机 夏陽が直射する

子の夢を広げる積木高く積む

倦怠期そんな小波にゆきぶられ

こけし買うお金ポシエツトから探す

雲低くたれて決断さまたげる

男気を出すふところを勘定し

雑兵の汗を集めて城固い

決論をまとめる軽い咳ばらい

首位の座を守る采配胃が痛む

ふりかかる火の粉は父の背なが消す

ライバルを迎える部屋は飾らない

石橋をたたいてからは歩を早め

喪服脱ぐ女にたくましさを見る

対岸の火事へ油を持って行く

モナリザの微笑　女として見入る

夜行列車に女ひとりが膝を組み

自信喪失　小さな風に迷わされ

窓際に居てフルムーンプラン組む

悔いのない過去燃やす火が美しい

抜擢の椅子で妬みの風に耐え

深刻な顔が茶店の隅を選り

なつかしい汽笛津和野へ聞きにゆく

嫁がせたやすらぎ白い足袋を干す

楽天家に何かがあつた腕を組み

初競りの蟹 万円の泡を吹き

日曜大工叩いた指をまたたたき

十二月売る目買う目が殺気立ち

念仏をあげて睨に母と逢う

気の乗らぬ見合い化粧を手抜きする

年上の妻の年金当てにする

みぞれから雪 鍵っ子眠くなり

Uターン 故郷の水も甘くない

枕木をはがれて戻る駅が無い

男運ない娘が年の瀬に戻り

ロボットは落ちたゴミまで拾うまい

一円を拾う素直さ忘れてる

信心の頭へ鳩のふんが落ち

Uターンの傷を古巣であたためる

表札は陽のよく当る方に掛け

裸婦の絵を讚える列が進まない

合点の行かないままに酒となり

緊張感ほぐすジョークが出てこない

新人類に自慢の石もただの石

初参加も勝てる自信は持っている

肩の凝る話コーヒーさめている

パチンコ屋へ行けば必ず会えるひと

和服着ておんな遠慮深くなり

年輪の中に杉の子眠ってる

宝くじ娘もそつと買っている

枕木も兵士輸送の過去を持ち

色あせて記憶とぼしい写真操る

観光へ流人の島がよみがえり

どん底を登れば夢の国がある

連絡船欠航　島で飲みなおす

酒のない国へ行きたい二日酔い

宝物　軽いつづらに入れてある

台風の暴れるままに夜を明かし

出稼ぎを送る渡しを妻が漕ぎ

例外が世間を広く甘くする

山陰の旅の鞆に傘を入れ

数え唄やさしい母へあこがれる

立たされた記憶廊下は寒かった

夫唱婦随 趣味も夫について行く

先走る風にペースを崩される

表彰へ妻控え目な位置に居る

長針ががくりと動き発車ベル

かくれんぼ揺れる木蔭に尻が見え

メーターにおかまいもなし水遊び

ひと休みしてから調子狂っちゃい

休憩の時間になって眠気覚め

にわか雨 傘が届いてから上がり

左遷とも知らぬ子供のはしゃぎよう

夜店もう仕舞った空に星が降り

追いつけぬ相手が転びテープ切り

戦友が来て戦友を呼びにやり

もう一夜延ばし珍客呑み直し

人形を抱いておませなことを言い

煙草の害説く先生もやめられず

正直に言つて疑いまだ持たれ

理髮屋のハサミ眠気をさそう音

新しい鋏なんでも切りたがり

遠慮していたのがうどん二杯食い

準備体操みんな優勝する構え

正確に時間守って待たされる

アベックで撮った写真に鹿がおり

アベックと知らず彼女に声をかけ

味を知る客が宣伝してくれる

繰り返さなければよかつた嘘がばれ

お隣の竿のも入れるにわか雨

珍客が来て鶏の餌やり忘れ

転勤の父へ仲よしとも別れ

失敗を素直に詫びて軽くすみ

いま拭いた廊下裸足の子が戻り

漁り火へ父のあかりと確かめろ

由多香



招待状 涼しいことも付け加え

スタートのみんなな自信に満ちた顔

辞められぬわけ年頃の娘が二人

節約はせよと父から金が着き

書留で戻った旅の忘れもの

豆まいて福来たような炉を囲み

灯を消せば炊事場からも虫が鳴き

傘の礼に来てまた借りる俄雨

修理したばかりの借家追い出され

誘われたおでん屋古い借りがあり

落書きを登山記念に残して来

虫が来て鳴く雑草を刈り残し

交代がなくて花見を一人抜け

配給米だけでお鏡小さくとり

生あくび噛んでる顔と顔が会い

避けようと回った裏で顔が逢い

避難したところで家財を全焼す

盃で酔えずコップで酔いつぶれ

カレンダー壁のよごれをうまくとめ

売出しが済んで赤札白に替え

帰省して母のへそくり又ねだり

わがことのように母さん詫びてくれ

叱られた後母さんが買ってきてくれ

針の山見て来たように子へ教え

隣まで来たと催促におわせる

退屈で入った映画に飽きてくる

父へする弁解母も練つてくれ

弁当の赤飯みなに尋ねられ

よく馴れたつもりで出した鳥が逃げ

おとなしいはず唐紙に落書中

小説が終り新聞中止する

小説の筋書きどおりになり慌て

中古で育てた次男の世話になり

道問えば大工口から釘を吐き

五寸釘 僕のはね返し

むつかしい話になった火鉢逃げ

灯を消した隣へラジオ小さく聞き

卒業の祝杯 父だけいい機嫌

療養へ花びんの位置を変えても見

卵酒やっぱり医者に行く決め

停電へマツチななか見つからず

聞かなけりやよかつた話聞いちまい

頼りないほど気安うに診て帰り

先生も風邪 往診を断られ

下駄の齒のちび方までが父に似て

口曲げて曲げて口紅やっど塗り

父のない子へ肩車せがまれる

叱られたくやしさを蹴って耐え

再起の日近く座右の銘も変え

雨の日のこと計画に入れ忘れ

回診がすんで病室賑やかに

同趣味と聞いて一本追加する

上役とおんなじ趣味をねたまれる

妻の愚痴 蚊帳の外からまだ続き

蚊帳吊ってやってあしたの米をとぎ

請求書派手に騒いだ酔いが覚め

夜警邏も無事に終つて星仰ぐ

俺を待つわが家の灯だけまだ点り

焚火の輪 今日の仕事を貰つてる

先代と変らぬ味で伸びもせず

お隣の匂いへカレー欲しくなり

ステテコになってまだまだ飲む構え

託児所のような騒ぎは父母の留守

日雇の手袋乾かぬままで出る

お昼寝へけんかに負けた子が戻り

やりくり疲れ顔で妻昼寝

上役が抜けて宴会派手になり

裏の裏知って余生を逆らわず

方言のまままで速記に納められ

申請書明るい顔の方へ出し

信用と誠実 老舗にある誇り

逆境に耐えて誇りを失わず

垣一つ隔てて隣い暮らし

境界を争うた垣バラが咲き

背なの子に急かれおしゃべりけりをつけ

苦笑いしながら無理を聞いてくれ

ステテコの患者に暑さ劳われ

注意して出した使いが落として来

大吉のみくじ一緒にすりとられ

割り箸で茶碗を叩くだけの芸

ピンチ脱け出した煙草の輪を吹かし

おでん屋で飲んで二次会派手にやり

美しい女に電車乗り過ぎ

会えばすぐ解けた誤解に悩みぬき

ジュースだけ飲んで二次会までつとめ

居眠った不覚要点聞きのがし

再選を狙う噂の橋ができ

社長また下手な小唄を唄いだす

かけ込んだトイレただ今掃除中

飲みっぷりまで父に似て梯子ぐせ

かん詰で料理がでできるまでを飲み

反対の一人に会議牛耳られ

家出までした結婚がもう別れ

編み直ししてセーターの若返り

へそくりへ月給袋書き替える

恋人にされてしまった立ち話

逆境に負けず素直な子に育て

懐しい思い出話 炭をつぐ

けちん坊でよし堅実な道歩む

恵むこと知らず世間を狭う住み

いつ来ても手みやげ持たず酔うて去に

もう家が建つほど家賃払って来

郵便夫一・二戸配る坂登る

急坂をやつと登つていい眺め

帰省子の父より高い背にあきれ

お手並を信じて河豚の鍋囲む

病人のぜいたく素直に聞いてやり

ぜいたくなお隣がいて気疲れる

抜てきの栄転妻をあわてさせ

縮むだけ縮んでバネの跳ね返る

なるほどと思うあだ名の癖を出し

蟹泡を吹いて逃れる隙狙う

雀捕る仕掛けを雀来て覗き

せめてもの抵抗 虚勢張ってみる

頂上が見えてお腹が急に減り

波を見ただけで船酔いもう憶え

母が塩少うし足して味が生き

もてなしに甘え一汽車遅らせる

たまに來た従弟に保険勧められ

餞別に包む紙幣のしわをのし

位置変えて石の丸味を部屋に向け

箸割って待つ子へうどん熱すぎる

年寄りの指図で法事無事終り

ネックレスした先生と街で会い

転勤へ犬も疲れた顔で着き

受験子のくしやみへ母は炭を足し

新しい名簿わが名を確かめる

くたびれたようにゆるんだ荷が届き

万国旗こんな小さな国を知り

折り詰を前に祝辞の長いこと

出張の父に代つて豆を撒く

責任を果たした酒がよくまわり

思案する顔を子供にのぞかれる

集金が出来ぬと集金待たされる

食うだけは食えと失恋いたわられ

溜息をしいしい母さん買ってきてくれ

娯楽費を削り月賦の冷蔵庫

飲むだけを飲んで空びん邪魔がられ

突然の客へ浴衣の裏返し

夜市の灯消えて星降る夜に戻り

旺盛な食欲　母の分も食べ

灯を消しに立てばあれこれ頼まれる

ぼろ隠すカーテン少し派手な柄

開店の隣と同じ値引する

うなづいて同感という目が笑い

節くれた指に一家を支えられ

病人を小馬鹿に鼠顔を出し

回り道して言い訳を考える

正論の一人へ強い風当り

弁解のついで仲間の名も連ね

療養の孤独　小鳥にいたわられ

ひとり旅　無性に話したくなり

雲低くたれて決断まだつかず

ある物で食べてと妻の置手紙

合格を祝うてくれた方が酔い

義理だてに入った保険に助けられ

核心に触れてどもりがひどくなり

砂丘にも育つ草あり緑化され

役員になって母さんおしゃれもし

栄養があると思えばみなうまし

漁り火と地酒に旅を
いたわられ

由多香



満点という栄養に腹が減り

提灯の文字ひと回りして読ませ

菊賞めてきて寄付金のことにつれ

うつぶんを晴らす輪もあり宴盛ん

僕だけにわかる符号もある日記

信用ができず世間を狭う住み

厄だった忘年会を派手に飲み

賽銭に万円札もある景気

三ヶ日すんで内職また始め

シグナルも疲れたような吹雪の夜

冷え症の母へ懐炉のいる季節

早発ちへ時計のネジを確と巻き

流感を出張の父持帰り

深刻なアベックもいる喫茶店

先輩へさぼり方まで教えられ

氷屋を出ればお水が欲しくなり

人波にもまれただけで夜市すみ

ポリ袋 金魚の腹が透けて見え

弔問のあいさつ母に聞いて出る

下心 におわす声を鼻にかけ

行違いさせて泣かせるメロドラマ

誘ったら欠勤届あずけられ

弁当を包む新聞読み直し

手配写真みんななくせ持った顔

顔をほめてお見舞い元気づけ

庖丁に錆も出ている妻の留守

相性はいいはずだった離婚沙汰

イロハ順いつも名簿の尻におり

お隣も落葉焚いてる日曜日

負け惜しみ言ってみなしさかみしめる

やりくり疲れ妻の深い呼吸

もう修理きかない靴にある未練

父の死へ進学希望あきらめる

スピードを落とせと揺れるマスケット

行楽を狙ったようにバスのスト

泣き声でオムツと母は聞きわけ

雨雲へ今日の洗濯思案する

夕立へチャンスとばかり傘を貸し

伝言も聞いてあずけた鍵もらう

困らんのこたつに猫も来て眠り

またチャンス逃がした内気がみしめる

何事もなかった待機眠くなり

親方が一こて入れて仕上げられ

義理ひとつ欠いて疎遠な仲となり

女医さんの方の注射の列につき

曲るところ曲って蟻の列続く

大工賃値切って仕事省かれる

お隣もさんまさんま買ってくる

新調の自転車錠を二つつけ

人形に話かけた空虚な日

夜なべして母もテストの子と励み

死線越えてから人間味が生まれ

新人の無欲 優勝かつさらい

商魂は値上げをいわず量を減し

米値上げぞろぞろ値上げついてくる

駐在の灯り平和な夜をつくり

うさ晴らす陽気な歌を口ずさみ

半分は税金と聞く酒造り

華やかにデビューすつと消えてゆき

伸ばすところばして無理のないしつけ

味噌汁のお替りほしい旅の膳

けが一つなかった事故を不思議がり

隙間風は父が背にうけ膳かこむ

遺産でバー開いて女若返り

共稼ぎ早い方から米をとぐ

米粒のそれぞれ貌と艶をもち

がまんしたトイレ落書読んで出る

攻めさせてお手並を見る隙つくる

市街地を抜けて運転子にまかせ

相談にのつても金は出さぬ肚

父の顔知らずに父の墓洗う

酒ぐせも父に似てきた二日酔い

結論はだまって聞いてた父が出し

末席に坐って代理かしまり

ふくらんで河豚警戒の面構え

陽を一ぱい吸ったふとんにあるぬくみ

夜汽車にもなれてセールスうまくなり

いたずらを素直にわびる瞳がきれい

月賦もうすんだクーラーよく冷える

心臓が止まる思いの訃報聞く

内緒もうばれてしまった壁に耳

壁厚く土蔵の歴史守り抜く

押葉した思い出 鎮守さまの森

入学のもう苦手意識持ちはじめ

機械ではできぬ強さを手で伝え

子の意見入れて明るい家庭の灯

いい眺めあるから楽しく坂登る

信心と息抜きに来た小豆島

息抜きも兼ねて人間ドック入り

借入れのメドがついたで髭をそる

回復のきざしきれいに髭が剃れ

蟹の値をのぞいて見るも十二月

歯で糸を切ってる姑のまだ達者

二百カイリ魚に国籍つくられる

生きているように鯛は火にくねる

着飾って女同志のよくしゃべり

漁帰る 浜の女も語気荒らし

飾っておくだけの書棚の名作集

家計簿をしめて茶の間の灯が消され

のし袋 バイトの汗が詰められる

金がないないは口ぐせ溜めている

門出には門出の涙母はもち

めでたい日 犬もあやかる鯛の骨

祝電を聞いてお腹の児が動き

朝早よう起きる長寿をじやまがられ

兵歴も書いて就職難にいる

商魂は四角な竹を育てあげ

隣まで行って竹の子皮を脱ぎ

竹割った気性が姑の気に入らず

部屋一ぱいおもちゃ子の夢果てしない

寢覚めいい朝の鏡は澄んでいる

耐えるほど睡魔きびしく追ってくる

一年がまた始った酒を酌む

倅せはないかも知れぬ坂登る

補聴器も縁談の座にかしこまり

台風の進路はずれた釘を抜く

手のひらへ転がせて見る米のでき

賽銭をはずみあれこれ頼んどく

かめぬ歯へ孫のみやげの五色豆

育つ子が虫一ぴきへ母を呼ぶ

美しくなりたい化粧変えている

税の使途練るお役所の灯が明かい

滝しぶきリズム変らぬ音で落ち

雑念を払うてくれる滝の音

手を振れば田舎のバスは待ってくれ

お世話をさせて下さいプロポーズ

快方に向うわがまま聞いてあげ

もつれ系ほぐすめがねのくもり拭く

スタートの狂い 半生棒にふり

税金がちよっぴり減った左遷の地

駄目押しのように不渡りつかまされ

産み月の素足を姑にさとされる

涙もろい父と母です平和です

何拝むやら老婆無心に鈴を振り

猫鈴を振りふり恋をして歩き

すんなりと行かぬ顔ぶればかり寄り

すんなりと行けば行つたで物足りず

人波を器用に抜けた白い杖

新記録プールの波もまださわぎ

信心が食中毒にかかった旅

ささやかに暑さをしのぐ水をまく

貧乏をしのぐ茶碗にひびがある

塩だけは安いと思う物価高

松すねたように枝ぶり育てられ

ギャンブルは好きと仲人言わなんだ

保護色という武器弱い虫守る

温度計 涼しい朝のまままで欲し

まだ逢えぬドラマへそつと涙拭く

仏間から柱時計が朝を打つ

サングラス奥に不敵な目が光り

絶好のチャンスつかんだ足が浮き

店じまいマネキンさんも脱がされる

ライバルがまっ先見舞い来てくれる

足で戸を開けると孫に見つめられ

大ジョッキ涸れた五体がよみがえる

神棚が埃かぶっている平和

はき馴れた靴で再起の朝を出る

ボスが居て猿には猿の国があり

公害もない故郷の野良に立つ

不気嫌な顔にたばこの火をもらおう

ギャンブルを呪い夜逃げの荷ごしらえ

先祖にはすまない土地を売る落ち目

おみやげもつくり祭りの母せわし

旧道とバイパスまたぎ虹の橋

あわて者だから笑ってすまされる

同情が過ぎて商売儲けてず

歳時記に日本の心見つけたり

暖かい人情 民話からもらう

秀才の血筋 文学書をあさる

名は会議 名所旧跡見て回り

あきらめたつもり
の足が元に向く

バランスを保つ
右肩少し下げ

目標の大きさ
くらし切り詰める

横波に弱い泥舟
岸がない

吊り橋を渡り
愛情確かめる

ともかくも完走をした汗を拭く

骨にまでしみた意見に大志抱く

禁煙を誓って三日だけはもち

わかとりののはばたき確かなり
初日

控え目な無欲へ神が味方する

噂とは違う人事に社がゆれる

狸にも誤算があつた泥の舟

栄転の噂に椅子が落ち着かず

世間体思う眞実曲げられる

普段着に着替え緊張から抜ける

商人の嫁になりきる数字読む

母の日も母が動いてから明ける

予定日がのびてヒツジがサルになり

切符二枚ふる里捨てる汽車を待つ

引越した朝太陽が逆になり

セツトした頭が顔をカバーする

生きている証しに噴火して見せる

達筆でなくとも読める文字が欲し

腰浮いた後ろ姿は追わずおく

あとがき

句集発刊など大それたことと思いつづけて来た私も、還暦という人生の節目を迎えることが出来ました。そして川柳に興味を持って三十五年にもなりました。かねがね還暦をチャンスにして、川柳を通じて何かをやりたいなどは夢に抱いていました。もちろん、句集、句碑などおこがましいものではなく、川柳を支えて下さる皆様方に感謝の心を表わすことを、絆をと念じておりました。故河村日満先輩が口ぐせのように、「句集にするような作品も、句碑に刻むような句もない」と話しておられましたが、私もこの心境そのものでおりました。

しかし一つの区切りとして、今までの作品を整理し、ご批判を仰ぐとともに、二巡目に入った人生川柳への決意とすることも、意義があるではなかろうかと、励ましもいただいた中で句集発刊に踏み切りました。

充分な整理のできないまま、三十年間の作品の中から一千句を抜き出し並べた

だけの、誠に恥かしいものばかりでございます。

作者の分身といわれる作品、一句一句にそれぞれ思い出があり、懐しいものばかりです。

序文を川柳塔社主幹西尾栞先生にいただき、題字は川柳一家のお母さん、中原汲香さんにお世話になりましたことは感激の極みであり、心から感謝いたしております。

また発刊に当りご声援をいただいた鳥取県川柳作家協会の皆様、何から何までお世話下さった句集発刊実行委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。
本当にありがとうございます。

思い出をたぐり還歴かみしめる

一卷の句集 絆をまた深め

昭和六十三年四月吉日

小林 由多香

略

歴

昭和 二年十一月
昭和 十九年 八月
昭和二十年 八月
昭和二十三年 三月
昭和二十五年 五月
昭和四十一年 一月
昭和五十九年十一月

鳥取市に生まれる
大竹海兵団入団(広島県)
終戦により松山市より復員
鳥取県警察職員
杉井芳子と結婚
山陰ナショナルクレジット(株)入社
同社定年退職

昭和三十八年 六月
昭和四十四年 八月
昭和五十年 六月
昭和五十一年 九月
昭和五十一年 九月
昭和五十二年
昭和五十二年
昭和五十二年
昭和五十二年 十月
昭和五十八年十一月
昭和六十年 六月
昭和六十一年 四月

日本海川柳友の会幹事
川柳塔社同人
うみなり川柳会幹事
うみなり川柳会会長
日本海新聞柳壇選者
川柳塔社参事
鳥取市文化団体協議会理事
鳥取市文芸協合理事
鳥取県川柳作家協会副会長
鳥取県川柳作家協会会長
日本川柳協会常任理事
NHK学園川柳教室指導講師

川柳句集「いさり火」

昭和六十三年四月二〇日印刷
昭和六十三年五月十日発行

著者 小林 由多香

発行者 小林 豊

〒680 鳥取市相生町一丁目一〇
☎(〇八五七)二三一一一七〇

編集者 句集「いさり火」発行
実行委員会

印刷所 巧印刷

〒680 鳥取市相生町二丁目四一三
☎(〇八五七)二四一六二八八

頒価 1,500円